

イエナ時代のヘルバルト : 1796年の足跡

著者	杉山 精一
雑誌名	神戸外大論叢
巻	50
号	4
ページ	17-32
発行年	1999-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001476/



イエナ時代のヘルバルト

—— 1796 年の足跡 ——

杉 山 精 一

1. はじめに

ヘルバルト (J. Fr. Herbart, 1776-1841) の思想形成の原点、それは今日においてもなお家庭教師としての彼の実践 (1797-1799) やペスタロッチーとの理論的な接点である「直観教授」(1802) といった教育学的文脈の中で語られている。いわばそれが古典的な教育学者として位置づけられるヘルバルトの存在理由ともなっているといつてよいであろう。けれども彼の青年期の足跡をたどるとき、その知的活動の原点はそれ以前、すなわちフィヒテに代表されるドイツ観念論との関係 (1795) から出発していることに注意すべきだろう。その関係は単なる伝記的なエピソードではなく、その後の彼の思索を決定づける重要な契機となっている。というのもこのイエナ大学以降、彼はその後一貫してフィヒテやシェリングに代表される哲学的潮流とある距離をとり続けからである。本稿の目的はヘルバルトの思想形成の原点が、教育に理論的な関心を深めていく以前のイエナ大学在学中にその端緒があることを哲学的文脈の中で明らかにすることにある。

1794年10月、ヘルバルトはその本格的な学問研究の第一歩をイエナ大学に赴任した直後のフィヒテのもとで歩み始める。このイエナ時代 (1794-96) から家庭教師時代 (1797-99) にかけて彼は独自の思索を深め、その後ブレーメン滞在 (1800-1802) を経て『ペスタロッチーの直観の ABC の理念』(1802) を著し、ドイツ観念論との距離をとりながら教授もしくは教育学の重要性を強調していくことになる。イエナ時代とは、まさにこうしたヘルバ

ルトの思想形成の出発点に位置している。フィヒテ哲学の洗礼、友人たちとの友情に満ちた交流、母親との確執など様々な感情が交錯する彼の青年期は、まさに自らの歩むべき道を模索し続けた思想の胎動期であったといつてよいであろう。

けれどもこれまでイエナ時代のヘルバルトについては、その混沌とした青年期の思想的文脈の複雑さから、彼の思想形成の中心的論議としてはほとんど注目されてこなかったように思われる。⁽¹⁾ 本稿では、このイエナ時代に彼が経験し、克服しようとしたものが何だったのか、まずその具体的な事実関係を時系列的に整理することから始める。この作業の目的は、その混沌としたイエナ大学入学後の彼の足跡をたどることで、その知的活動の歩みを明らかにすることである。そこでは1796年に集中して試みられたシェリング研究が浮かび上がってくる。その上で彼の思想的原点について若干の問題提起を試みたい。

1795年、ヘルバルトは両親の希望する法学研究に対して自らの歩もうとしている道を次のように述べている。

「基本的に私は、哲学や美的な諸学問、また数学さえもさらに研究を進めることができるようになるまで、法学にふれたくないのです。」⁽²⁾

家庭教師時代に本格的に取り組むことになる数学研究、さらにその数学を土台に美的な感覚へと向かうことを意図した『直観のABCの理念』(1802)に至る道は、このイエナ大学時代にその萌芽を読みとることができる。まず彼の足跡を見てみよう。

2. 若きヘルバルトの足跡 —1794年から1796年12月までの年譜—⁽³⁾

年 月 日	で き ご と
1794年	
3月24日	ギムナジウムを卒業。
5月	フィヒテ、イエナ大学に赴任。後にヘルバルトの最も親しい友人とな

- るシュミットは、フィヒテ、ヴォルトマン、ニートハンマーの昼食会に招かれ、そこで始めてヴォルトマンからヘルバルトの名前を聞く。ヴォルトマンは ヘルバルトと同じオルデンプルクの出身で、ヘルバルトのイエナ大学入学には彼の存在が大きく影響していた。
- 10月20日 イエナ大学入学。フィヒテの講義を聞く。このころ眼の病気などの体調不良に加え、フィヒテの初期知識学の影響など精神的に「無気力な」状態に陥る。
- 11月26日 ヘルバルトはヴォルトマン教授の推薦で、フィヒテを中心にした学生たちのアカデミックなサークル「自由人協会」にラテン語の論文を提出し、参加を許可される。このサークルがフィヒテとヘルバルトとを結びつけるきっかけとなり、その後このサークルでの活動は、彼のイエナでの学生生活に大きな影響を与えていくことになる。
- 1795年
- 3月12日 「協会」での会合で、詩の朗読を提案する。その後何度も彼はこの「協会」で詩の朗読をしている。
- 7月19日 フィヒテと学生団体との間でトラブルが起き、フィヒテは一時イエナを離れる。避難所となった住居に、ヘルバルトはフィヒテのために何度も手紙を届け、時にはヴァイオリンを持ってきてほしいという彼のわがままな願いも聞き届けている。
- 8月28日 「肉体と精神のある種の無気力さから、次第に目覚めつつあります。」⁽⁴⁾
この友人宛の書簡から、フィヒテ哲学の衝撃と精神的苦悩から、次第に回復しつつあることがうかがわれる。またこの時期、相変わらず眼の病気や頬の潰瘍など肉体的な病気に苦しんでいる。
- 9月 四週間にわたるカールスバート、ドレスデンへの「協会」の旅行でシュミットと親交を結び、将来の研究活動やこれからの生活など、初めて自分のプライベートな告白をする。これがきっかけで、シュミットは「協会」で知り合った最初の親しい友人となる。このとき、まもなくイエナでの研究活動を終えてプレーメンに帰るシュミットに、オルデンプルクにいる両親に会って、単に就職だけを目指すための研究をするつもりがないことを伝えてほしいと頼んでいる。
- 10月1日 フィヒテの知識学に関する最初のコメントを書いている。⁽⁶⁾

10月 ピアノが届き、ヘルバルトの心の安らぎとなる。またその演奏はイエナでのすばらしいピアノ演奏家の一人に数えられる。

1796年

1月29日 山野の放浪を数日経験する。友人シュミットに、母親との確執をかなり具体的に語る。10月から11月にかけて様々な出来事を綴った両親宛ての書簡三通が盗まれるというハプニングがあり、連絡のなかった母親はヘルバルトを激しく非難する。またこの時期フィヒテは自然法⁽⁷⁾の研究に真夜中まで没頭し、ほとんど顔を見せていない。後に親交を結ぶリストとグリースが「協会」に加わる。

2月20日 ヘルバルトについて母親がシュミットに相談する。
「まる19年間息子と共に歩み、いやそれどころか見守り続けてきました。…彼が何のおそれも抱かず、つかみ所のない全く見知らぬ道へと一人で歩んでいくことを、私は未だに理解できません。」⁽⁸⁾

2月26日 ヘルバルトとベルガーがフィヒテの国家論に不信感を抱く。⁽⁹⁾

4月6日 母親がシュミットをオルデンプルクに招待する。ヘルバルト家で歓待を受ける。

4月 フィヒテとその夫人と共に、ライプチヒへ旅行をする。

5月8日 母親がヘルバルトのことについて、シュミットに相談する。二人の確執はますます深刻になる。またこの時期母親は、イエナに向かう準備を整えている。

6月 ワイマールからの帰り道「詩」を書く。また「私の生の瞬間」を書く。

6月27日 母親のことを、ヘルバルトはシュミットに相談する。また6月27日の書簡で、後にシェリング研究の直接的きっかけを与えたヒュルゼン⁽¹⁰⁾についての詳しい叙述が初めて登場する。ヘルバルトは彼を高く評価している。さらにこの年の始め頃ベルガー、リスト、ヒュルゼン、グリースらとワイマールへ旅行し、シュミットに彼らとの交流がいかに充実したものであったかを力説している。

「この三ヶ月は、本当に私にとって無限に続くような時間でした。」⁽¹¹⁾

この三ヶ月は、「協会」におけるヘルバルトの活動の頂点であった。また夏の間にフィヒテ哲学の克服に向けて本格的に取り組みたいと述べている。ヤコービをめぐる議論が、ベルガーを中心に行われる。

7月13日	リストの論文を批判したグリースに対してリストを擁護する。
7月20日	ヒュルゼンの論文に刺激を受ける。
7月29日	フィヒテに息子が生まれた（7/18）ことをシュミットに報告。
7月30日	母親がイエナに到着し、関係がやや好転する。彼女は出産後のフィヒテ夫人の世話をするなど、イエナでの生活を始める。またこの時期のグリースはフィヒテの講義を聴講し、ヒュルゼンはシェリングに傾き始めている。親しかった友人のほとんどがすでにイエナを去り、自分の哲学的歩みが友人たちとは異なる独自の道を歩み始めていることを感じながら、彼はシェリングに関する詳細な研究を始めることをシュミットに報告する。
9月	シェリング研究に没頭し始める。最初の成果「スピノザとシェリング」を「協会」で発表し、リストにも報告している。このころから「協会」の中で不協和音が起り、ヘルバルトは孤立感を深めていく。またシェリング研究と共にヤコービを研究していること、さらにそこから多くの成果を得ていることをリストに報告する。
10月	母親とライプチヒへ旅行をする。
12月	シュミットにシェリングに関する論文（「シェリング論文に関する試み：哲学一般の形式の可能性について」「シェリング論文：自我あるいは人間の知識の無制約性について」）をシュミットに送る。また最後の論文についてはフィヒテに意見を求め、それに失望したことをシュミットに訴えている。

こうした事実関係を確認する経過で、イエナ大学入学後のできごとを整理すると次のようになる。①イエナ大学でフィヒテを中心に活動していた知的な学生集団である「自由人協会」のメンバーとの交流、とりわけベルガー、ヒュルゼン、グリースらの影響。②フィヒテ哲学の影響と懐疑③母親との確執④シェリングの批判的研究と論文。⑤独自の哲学的思索とフィヒテ哲学からの離脱。

このように見ていくと、イエナ大学入学後のヘルバルトの様々な知的活動の足跡は、1796年12月にその成果を見るシェリングに対する批判論文にひと

つの頂点を迎えていることを確認できる。それはイエナにおいて彼が経験した様々な哲学的交流の成果であり、またその後家庭教師時代に引き継がれていく学問的課題そのものでもあったと思われる。彼はこの論文以降、シェリングやヘーゲルに代表される哲学的潮流とは一貫してある距離を持ち続ける。この直後の家庭教師時代に没頭していく数学研究、さらにその後数学を土台に「直観理論」へと向かうペスタロッチー研究の理論的原点は、このシェリング批判論文にさかのぼることができる。まずシェリング研究に至るまでの足跡を簡単に確認しておこう。

3. 苦悩と模索

(1) 母親との確執

1796年2月20日、ヘルバルトの母親はシュミットに切々と息子への思いを訴えている。

「まる19年間息子と共に歩み、それどころか見守り続けてきました。…彼が何のおそれもなく抱かず、つかみ所のない全く見知らぬ道へと一人で歩いていくことを未だに理解できないのです。…私の息子は、外から何かそそのかされて動くような人間ではありません。けれども彼が本当に誤った道を歩んでいないかどうか、これは全く別の問題です。」⁽¹²⁾

イエナ大学入学以後、両親とりわけ母親はヘルバルトの進路に不安を抱き続けていた。「見知らぬ道」とはヘルバルトの希望した哲学研究のことである。法学研究を進める母親に対して、ヘルバルト自身は大学入学以前から自らの進むべき道を哲学に見定めており、入学当初からこのことに頭を悩ませていたようである。この問題に、イエナ大学での最初の親しい友人となったシュミットは、ヘルバルトと母親との間に立っていわば仲介役を引き受けている。1796年に母親とヘルバルトは、それぞれシュミットにあてて頻繁に書簡を送り、お互いの関係の修復のために彼に相談している。こうした状況で

シュミットは1796年4月にオルデンプルクを訪ねて歓待を受け、母親の心配にも注意深く耳を傾けながら、イエナに向かうことになった母親に助言を与え続けたのである。その後1796年7月、ヘルバルトは故郷オルデンプルクを旅立った母親をイエナで迎え、生活をともにすることになる。そのときの感動を、ヘルバルトはシュミットに次のように述べている。

「青空が再び明るく広がっています。彼女はここにいます！…私はようやく今、一日中母親と生活をともにし、彼女を抱かしめることができました。⁽¹³⁾」

すでに破綻していた夫婦生活を清算し、新たな生活を再び母親はヘルバルトとともに歩み始めたのである。⁽¹⁴⁾ ヘルバルトがフィヒテ哲学から離れ、シェリング研究に向かうのは、この直後のことである。

(2)「自由人協会」での活動と交流

フィヒテ知識学の洗礼を受けた後、さらに体の不調からある種の「無気力感」に陥っていたヘルバルトは、次第に回復しつつあった1795年8月28日、友人に宛てて次のようにフィヒテについて述べている。

「想像力の欠如を、フィヒテはほとんど現在の哲学の責任であると思いました。それに対して詩人たちからは、哲学のために多くのことを期待しています。フィヒテの哲学に熱心に取り組んだ人々の中で、彼は今日までシラーとゲーテが最もよく自分を理解したと信じています。フィヒテとの交流以来、私は人間形成に美的な能力の訓練がどれほど本質的に必要なのかを感じました。⁽¹⁵⁾」

ヘルバルトがフィヒテとの交流や彼が所属した「自由人協会」で学んだものとは、「美的な能力」の力が、人間の感情や陶冶にとってどれほど重要な意味を持つのかということであった。この書簡の言葉通り、ヘルバルトは「協会」において「詩の朗読」や芸術の重要性を主張し、その中心的なメンバーとして活躍していくことになる。ヘルバルトのみならず、「協会」に集

まってきた学生たちの多くは、哲学的・芸術的才能にあふれた者ばかりであった。彼らは毎週集まり、人間の使命や哲学について論じ合った。カントやフィヒテの哲学と、シラーやゲーテに代表される当時の文学的熱狂が、彼らの活動を動かす原動力となっていた。こうした活動の中で、1796年ワイマールでのヒュルゼンやベルガーとの哲学的交流は、彼に大きな影響を及ぼすのである。この熱狂を彼はシュミットに次のように述べている。

「ワイマールへの旅行で、私たちは出会いました。—ベルガー、ヒュルゼン、リスト、グリース、そして私です。ワイマールでは期待以上にハムレットがよく上演されており、そこで私たちはシャンパンで婦人の尊厳について論じ合い、互いに親交を深め合いました。それ以来私たちは午後の5時、時には1時から夜の12時までいつも一緒にいました。共に本を読み、熱狂し、歌い、哲学し、討論し、決して飽きて疲れることはありませんでした。…古き時代に思いをはせたり、さらに美しい未来を夢見ました。この三ヶ月間は、本当に私にとっては無限に続くような時間でした。哲学や美的な芸術の熱狂が私を魅了しましたし、…私たちの交流を盛り立ててくれました。」⁽¹⁶⁾

こうした友人たちとの人間的な交流や、芸術と哲学的な議論の中で、ヘルバルトは自らの哲学的方向性を見出していくのである。

(3) フィヒテからの離脱

ワイマールでの熱狂を報告した6月27日のシュミット宛の書簡で、ヘルバルトは次のように述べている。

「私はこの夏の間に、フィヒテの知識学と徹底的に決着をつけねばと思っています。」⁽¹⁷⁾

この書簡からはほぼ一ヶ月後の7月30日、すなわち母親との対面をはたした書簡では、さらに具体的に述べている。

「フローレート、グリース、そしてペーレンドルフは確かにフィヒテの所で聴講しているのですが、けれども彼らがそこで美の領域におけるように幸福であるかどうかを疑っています。私の哲学、あるいはむしろ私の哲学的歩みは、ますますあるひとつの独自の道を歩んでいます。とりわけ私には、フィヒテの自由論に対して非常に大きな疑念が生じています。…私はとくにシェリングに関する詳細な判断を試みようと思っています。」⁽¹⁸⁾

1796年の7月には、ヘルバルトはフィヒテ哲学からの離脱をすでに決心しており、その理論的克服を、ヒュルゼンによってきっかけを与えられたシェリング研究に求めたのである。10月から12月にかけて、彼は「協会」のメンバーであるシュテックとフィッシャーとともにシェリング研究に没頭し、12月にはシェリング批判の論文をシュミットに送り意見を求めている。彼がその論文で向き合い、提起した問題とは一体何だったのだろうか。1796年12月、大学入学以来模索し続けたヘルバルトの哲学的思考は、シェリングに関する三つの論文によって、ひとつの頂点を迎える。

4. シェリング批判論文の意味

1796年6月27日、友人シュミットへワイマールでの熱狂とフィヒテへの懐疑を述べた書簡の中で、ヘルバルトは次のような問いを投げかけている。

「どのようにして人々は、そうした無意識的な思考過程によって引きずられていくのでしょうか。」⁽¹⁹⁾

この問いは、ヘルバルトに人間の意識と無意識もしくは思考活動そのものへの関心がすでにあったことを示している。この文は、彼の友人グリースが次第にフィヒテ哲学に惹かれていく文脈で書かれている。それは言い換えれば、フィヒテ的な絶対的自我とは異なる自我への視線が彼の中に芽生え始めていたことを意味している。なぜ人は、すなわち自我はその思考の形成過程で影響を受けるのか。何ものにも影響されることのない絶対的自我とは何な

のか。その自我を我々はいかにして手に入れることができるのか。そもそも一体自我とは何なのか？

このような問いは1796年9月、シェリング研究の最初の成果である「スピノザとシェリング」という短い論文で具体的に現れている⁽²⁰⁾。ヘルバルトのシェリング批判論文のうち最も早く書かれたこの論文は、彼の問題意識を簡潔にまとめたものであり、その後続く二つの論文は、この最初の問題提起を論理的に引き継いだ内容となっている。従ってこの論文には、シェリング論文に対して彼が抱いた最も重要な疑問点が要約されて述べられている。彼はまず次のように述べている。

「この偉大な卓越した（スピノザの）理論は…ある欠点を持っている。

…この無限の宇宙の認識にどのように到達できるのか…を把握できないということである。シェリングは、この困難性をすべて廃棄してしまったのである。」⁽²¹⁾

ヘルバルトはまず、スピノザの理論が持っていた欠点をシェリングが放棄してしまつたと指摘する。すなわち無限なる世界の認識に我々が到達できる可能性を提示できない、という認識の問題である。この指摘に続いて、さらにシェリングの自我を次のように解説している。

「彼（シェリング）によれば、その認識そのものはこの宇宙であり、自我の認識そのものの知的直観によって自らを作り出す我々の内的な自我である。…この自我そのものは、絶対的本質であり、あらゆる實在であり、無限であり、不可分であり、不変であり、またそもそもひとつである。」⁽²²⁾

けれども一方では、「この自我が対抗するかの森羅万象は、まさにこの対立による非我」なのである。では非我もまた無限性を持つのであろうか。ヘルバルトは続けて次のように述べている。

「すなわち（対立する非我は）もともと絶対的には何も存在しない。

というのもこの自我が、無限の豊かさを持っているとすれば、その

反対の非我は無限の空虚であるはずだからである。⁽²³⁾」

絶対的に定立された自我が無限性を持つとすれば、他方で非我は一体どのような存在なのか。ヘルバルトは無制約的な無限なる自我の対極にある非我に、認識することのできない空虚な世界を見た。⁽²⁴⁾自己を定立する絶対的な自我が無限の豊かさを持っているとすれば、それと対置される非我もやはり同じ無限性を持つのであろうか。何者にも制約されない二つの無限性の存在はあり得ないのではないのか。

このような批判は、後にシェリングとフィヒテとの往復書簡で重大な争点となっていくのだが、⁽²⁵⁾ヘルバルトはこの時点でそれに気づいていたと思われる。シェリング自身は、やがてこの問題に「絶対者」という自我と非我を統一する存在を確信することで乗り越えようとしていく。フィヒテもシェリングも、自我が絶対的な存在としての知の原点であるという点では共通していた。けれどもヘルバルトは、自我そのものに絶対性を見るのではなく、自我活動のプロセスに注目することで新たな自我論を模索していく。その明確な方向性を12月にフィヒテに意見を求めた三番目の論文で、具体的に示している。彼は論文に対して加えられたフィヒテのコメントに、わざわざ次のような文章を書き添えている。

「しかしながらこの自我が、ただ単に原理として考察され、それが学者にとって唯一の存在としてのみ考察される限り…自我は完成してはいない。…そのような自我はあり得ないのであって矛盾している。哲学者は、この矛盾をきわめて注意深く展開させていかなければならない。⁽²⁶⁾」

ここには自我そのものの絶対性が、何ら現実性を持たない矛盾したものではないのかという彼の懷疑を垣間見ることができる。このことはさらに次の言葉によって明らかとなる。

「絶対的存在とは絶対的静止であり、それは完全に静止している。…静止は自我の死そのものであって、その活動性が自我の唯一の存在

なのである。⁽²⁷⁾」

このことに対するフィヒテのコメントに対しても、ヘルバルトは次のように自らの意図を明確に書き添えている。

「従って自我が絶対的存在の概念によって存在しないことを明らかにしたい意図を持っていた。⁽²⁸⁾」

また別の箇所でも、フィヒテのコメントに対して同様の指摘がある。

「自我は絶対的な存在ではない。⁽²⁹⁾」

こうして自我の絶対性から距離をとり、「無限性」の中に自我を求めるのではなく、多様に活動し続ける自我そのものに現実的な知の成立を求めている立場をとったヘルバルトは、当然「時間」という問題にも目を向けざるを得なくなる。なぜなら「無限性」の中にある自我は、当然現実の時空間に制約されない永遠の存在であるからであり、彼が述べた活動し続ける自我は現実の時空間で「時間」という制約を受けるからである。したがってこの論文には、絶対的自我と「時間」との関係を指摘する次のような重要な問題提起がすでに登場している。

「けれどもこのすべての時間を排除して定立される存在は、一体絶対的自我における特徴としてふさわしいのであろうか。…絶対的自我は時間によって制約されるのであろうか。⁽³⁰⁾」

ヘルバルトがこの「時間」という属性を持つ自我の概念に目覚めたとき、それは時間と空間という相対的な次元へと自我の問題を引き寄せたと考えられる。時間と空間の相対的な世界、それはその後彼が没頭することになる科学、すなわち数学が取り扱う世界である。

こうして1796年、ヘルバルトはシェリングの批判的論文を通じて、フィヒテの絶対的自我から離れていく。したがってこの三つの論文は、単に青年期の過渡的な論文として位置づけられるものではなく、一方ではフィヒテやシェリングに対する当時の哲学的潮流に対する批判であるとともに、他方ではここで展開した哲学的課題を自ら探求することを宣言した論文として位置づけ

られるべきであろう。またそれは、「スピノザとシェリング」で彼が投げかけた問題、すなわち自我活動の認識の問題として多様に活動する自我が外界をどのように認識し、道徳的な世界への扉を押し開いていくことができるのかという新たな哲学的課題に彼を導いていったはずである。それはその後自我活動の解明としての数学研究、さらに認識の出発点としての「直観」に引き継がれていったのではないだろうか。この論文から6年後の1802年、カント、フィヒテ、シェリングとの哲学的決別を宣言し、教授における直観の重要性を強調する原点はここにある。

ヘルバルトが認識、すなわち知の獲得する最初の出発点を時間と空間を超越した無限なる世界にではなく、あくまでも時間的属性を持つ多様な自我活動の中に求めたとき、彼の古典的な教育学者としての原点がそこに与えられたように思われる。その後彼が家庭教師時代に、この哲学的課題をどのように克服しようと試みたのか。またそれが教授とどのような形で結びついていったのか。この問題については今後の課題にしたいと思う。

註

引用及び参照したヘルバルトの論文は、すべて下記的全集による。またその末尾に略号 (K)、巻数、頁数を示す。

J. Fr. Herbarts Sämtliche Werke, hrsg. v. K. Kehrbach, O. Flügel
u. Th. Fritzsche, 19Bde., Langensalza 1887-1912, 2 Neudruck Aalen 1989.

- (1) このイェナ時代の最も詳細な文献としては、アスムスの著作が詳しい。アスムスは、例えば「自由人協会」に参加した友人たちについても詳細な報告をしており、本稿についても事実関係については多くの示唆を得た。ただ私見によれば、その詳細な具体的叙述に比べ、本稿で指摘しているシェリング批判の論文に対する思想的意味については、単なる伝記的なエピソードとしての位置づけしか与えられていないように思われる。この点については、さらに詳細な考察が加えられる余地は残されている。

Vgl. Asmus, W.: Johann Friedrich Herbart-Eine pädagogische Biographie.

- Bd I: Der Denker, 1776-1809 Heidelberg 1968, S. 72ff. und 310ff.
- (2) K. 16-11.
- (3) この年譜作成に当たっては、以下の文献を参照した。
 Vgl. Asmus, W.: a.a.O. 1968, S. 72ff. und 310ff.
 Erinnerung an J. Fr. Herbart von JOH. SMIDT. 1842,
 in: K. I-X X II ff.
 ただ基本的には、1795年から1796年末までの書簡を参考にした。
 Vgl. K. 16-6~44.
- (4) K. 16-9.
- (5) シュミットはフィヒテの息子の名付け親になった人物であり、フィヒテときわめて親しい関係にあった。このことを示すシュミットに宛てたフィヒテの書簡が、以下の文献で紹介されている。
 藤澤賢一郎ほか訳『フィヒテ全集第6巻 自然法論』哲書房 1997年, 481~483頁。
- (6) 「フィヒテ教授が数学者にあてた、直線および曲線の性質に関する問いの回答。『知識学の概念』42頁」K. 19-65~68. またこれについては翻訳がある。隈元忠敬ほか訳『フィヒテ全集第4巻 初期知識学』哲書房1997年, 499~503頁。
- (7) 1796年1月29日、シュミット宛の書簡では次のように述べている。
 「私はフィヒテを見ることはほとんどありません。彼は深夜まで自然法を研究しています。」K. 16-15.
- (8) K. 16-16.
- (9) ベルガーは1796年2月26日、シュミットに次のように書き送っている。
 「まもなくフィヒテの自然法の概略が出版されます。そこではひとつの国家が浮かび上がっていますが、十分満足しているわけではありません。私がよく知っているヘルバルト、聴講しているリスト…は、このような国家で生きていこうとは思いません。…私にはこのフィヒテの国家論があまりにも厳格であると思います。」K. 16-17.
 フィヒテは1795年の夏から「自然法とそれに結びついた国法」を研究し、冬学期に講義をしている。(『自然法論』哲書房 1997年, 473頁参照。) おそらく彼らはその講義を聞いたと思われる。彼らがどのような内容について不満を抱いたかについては、具体的な資料は残されていない。
 ただ書簡の中でたびたびフィヒテの婚姻法を批判する箇所がある。
 Vgl. K. 16-37. K. 16-40.
 またヘルバルトは、法を遵守するためにはそれを守る人間の道徳がしっかりと結びついていなければならないこと、その進展のために教育が必要であることを指摘している。Vgl. K. 16-37. K. 16-79.
- (10) ヒュルゼンについては、フリットナーがその学位論文で取り上げ、詳細な考察を試みている。アスムスもヒュルゼンに関しては、フリットナー論文を参考に解

説している。Vgl. Flitner, Wilhelm: August Ludwig Hülsen und der freien Manner, 1913. in: Wilhelm Flitner Gesammelte Schriften herausgegeben von Andreas Flitner, Band 5 München 1985.

ヘルバルトがフィヒテから離れるシェリング研究のきっかけを作り、またその後精神科学的教育学派の代表的な教育学者となるフリットナーの最初の研究が、同じヒュルゼンという人物でつながっていることは興味深い。

(11) K. 16-26.

(12) K. 16-16.

(13) K. 16-30.

(14) この二人がその後どのような形で理解し合い、お互いの生活を続けたのか。今日ではただ想像するよりほかはない。ただこの後の二人の関係を物語る興味深い証言がある。シュミットは次のように述べている。

「あなたたちは、私にはいつも一組の恋人同士のように見えます。」 K. 19-78.

また「協会」の友人で、後にシェリング研究とともに試みたシュテックも、次のように述べている。「彼は彼女であり、彼女は彼なのです。」 K. 16-39.

(15) K. 16-10. フィヒテは1794年7月、イエナでゲーテと知り合っており、彼を高く評価している。隈元忠敬ほか訳、前掲書、1997年、498頁参照。

(16) K. 16-26.

(17) K. 16-28.

(18) K. 16-31.

(19) K. 16-27.

(20) シェリング研究の直接的なきっかけを与えたのは、ワイマールでの熱狂を共に体験し、哲学的な議論を続けていたヒュルゼンであった。この論文を書いたとき、すでにヒュルゼンはイエナを離れていた。またヘルバルトは、ヒュルゼンとベルガーにこのシェリング研究の成果を報告している。Vgl. K. 19-89. 1796年9月のリスト宛の書簡で、ヘルバルトは次のように述べている。

「今私はシェリングとヒュルゼンを研究しています。…フュルゼンは、私が思うには、シェリングの研究によって完全に理解する事ができます。」 K. 16-37ff.

また同年12月のシュミット宛の書簡でも次のように書いている。

「なぜ私がこれほど多くの時間をシェリングの論文に費やしたのか。そのきっかけは…ヒュルゼンの論文でした。彼なしではこれほど完全に、そして明白にすることはできなかったでしょう。」 K. 16-42.

(21) K. 16-10. またこの認識に関してヘルバルトはこの論文で次のような疑問をシェリングに投げかけている。

「結局どのようにしてシェリングは、…この知的直観を伝えるのであろうか。」

K. 1-11.

(22) K. 16-10.

(23) K. 16-10.

(24) このようなヘルバルトの指摘は、フィヒテ哲学に対する彼なりの問題提起であったが、ヘルバルトのように絶対的自我のうちに「無」の世界を見た人物がもう一人いる。ヘルダーリンである。彼はヘルバルトとほぼ同じ時期にフィヒテの知識学を聴講し、熱狂する人々の中で冷静にその哲学を分析していた。彼の言葉には、本稿で指摘したヘルバルトの言葉と共通する問題提起がある。

松山壽一『ドイツ自然哲学と近代科学』北樹出版 1992年、121頁参照。

(25) フィヒテとシェリングの自我をめぐる対決については、以下の文献を参照。大橋良介『絶対者のゆくえ』ミネルヴァ書房 1993年、73～77頁、134～143頁。

ワルター・シュルツ解説／座小田豊他訳『フィヒテ、シェリング往復書簡』法政大学 出版局 1990年。

(26) K. 16-20.

(27) K. 16-23.

(28) K. 16-23.

(29) K. 16-25.

(30) K. 16-31.